くろいはな

桐生 拓人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
くろいはな

【Ｎコード】
Ｎ５５５５Ａ

【作者名】
桐生　拓人

【あらすじ】
鋼の錬金術師。エドワード・エルリックは、いっつもお世話になっているマスタング大佐にプレゼントを贈ることにしました。しかし、世間では今連続殺人事件が騒がれていて…　ＢＬ・死にネタ有

前編（前書き）

注意！この小説にはＢＬ表現が入ります。ＢＬ・ロイエド・死にネタのお好きでない方はブラウザでお戻り下さい。ＯＫな方のみスクロール←←

前編

偶然ほど残酷なモノはない

もしもあの時　あの場にいれば

もしもあの時　　出逢わなかったら

こんな想いなど　知らずにすんだ

―ザァァァァァ…―

雨が降り続く。
雲は空一面を多い、昼間のはずなのに誰もいない外には、街灯が無人の街を照らしている。
雨はコンクリートの壁に、屋根に染み込み、あたり一面を灰色一色に染め上げた。

「あぁ…」
ため息と共に声が漏れる。
雨は容赦なく降り注ぎ、今や彼のその黒い髪も、顔も、あおい軍服さえも濡れそぼってより一層深みを増していた。
「なぜだ…」

なぜ　私をおいて　いってしまったんだ

彼は頭を垂れてうなだれる。
抱え込むようにして腕に抱いている少年は、最早人としての機能を失っていた。
健康的に白かった彼の肌は、すでに街の薄暗い闇に映えるほど青白くなってしまった。
今こうして抱いている彼は、もうヒトでないものへと成り変っていた。
その半開きの唇からはもう何も出てこない

驚くほど長い金の睫が、覚醒に震えることもない

瞳の奥の金の焔も、揺れる三つ編みも、今となっては過去の遺物。

今も

そしてこれからも

チッチッチッチッ

男はまた時計を見上げた。さっき見たときからまだ十分も経っていない。おかしいな。もう夜勤明けの時間なのに。

「何度見たって同じですよ」

机の書類が減るわけではない。そう言いながらリザ・ホークアイ中尉は、男の卓上に凡そ３０センチほどもある書類を積み上げる。

既に男の机は元の面が見えないほどに紙で紙で溢れ返り、両脇には男の座高よりも遥かに高い書類の塔が建っている。

「中尉…」

男は項垂れながら言った。
「コレを…コレを昨日からぶっ続けで今日中にやれというのかね？？」
「正確には締め切りは今日の午後までです。今日が締め切りだっただけで、時間は一ヶ月ほど前からたっぷりあったはずです」
さらりと責めるリザに、東方の司令官。ロイ・マスタング大佐は無言で机に突っ伏した。
２９歳の若さで大佐の地位にいることから、目上の評判も悪く、毎日のように無理難題の書類を押し付けられ、そこに持ち前のサボり癖もかかる訳だから書類は通常の倍のペースで溜まっていく。
「ほら、あと少しなんだから頑張ってください」
コレのどこがあと少しなんだとロイは心の中で突っ込んだが、事実。三時間ほど前にはコレの四倍の量は裕にあったのだ。ここまで減れば神業をぶっ飛ばして最早人間ではありえないだろう。
「ちわーっす。―てあれ？もう仕事してるの？」
急に現れた別の声にロイが振り向くと、癖の無い金髪で結われた三つ編みと真紅のコートが視界に入る。
「あら、エドワード君」
リザは声の主に微笑む。
「大佐がまたいつものサボり癖を発揮してくれたのよ」
「中尉も毎日たいへんだね」
そう言ってエドワードも微笑み返す。そして書類の山を文字通り見上げた。
「あーあ。相当溜めただろ。オレより高い」
机の上に突っ伏す自分の上司と書類の山を見比べた。ようやく顔を上げたかと思えば、
「エドワード・エルリック…君も軍属なら手伝いたまへ」
「ご自分で溜めたんですから人任せに為さらないでください」
またもやリザがさらりと責め、ロイは再び書類の海にダイブした。そんなロイを尻目に、リザはエドワードを振り返り言う。

「今日はアルフォンス君一緒じゃないの？」
「用事があるから先にいってって」
少し俯いてエドワードが言った。
「そう。お茶でも持ってくるから、そこに座っていてかまわないわよ」
リザはそう言って出て行った。
話す相手がいなくなることで、執務室は静寂に満ちていった。やがて――
「終わったー」
というロイの疲れきった声が沈黙を破った。
「以外と早かったな」
と、エドワードは少しばかり感心した。
「当たり前だろう。コレで一体何度目になることやら――」
「何度目だよ？」
「二ケタ以上だ」
胸を張っていうロイに、呆れ半分。エドワードは少しだけ同情することにした。
「あ、そうだ」
エドワードは急に思い出したようにソファから立ち上がった。
「大佐。この後時間ある？」
その科白にロイは首を傾げた。
「夜勤明けの休みを貰っているので特に用事は無いが。何か？」
すると、エドワードは少し思いつめた表情で俯きながら言った。
「じ、実は相談に――」
「大佐」
エドワードが全部を言い切る前に、リザがファイルを抱えて入ってきた。
「これを」
手渡されたファイルを受け取り直ぐに内容を確かめると、深くため息をついた。

「何かあったの？」
「第一研究所付近の裏路地で人が惨殺死体になって発見されたそうだ」
ロイは椅子から立ち上がった。
「今から現場の視察に行く。用があるなら付き合え」
「りょーかい」
「ごめんなさいねエドワード君。折角二人の時間が取れたのに邪魔をしてしまって」
その科白に、エドワードは耳まで綺麗な赤に染め上げながら否定をする。
「／／／／／べべべべ別にそんなつもりじゃねーし。アル来たら直ぐ帰るつもりだったしっ」
「おや。やっと逢えたのだから、君がもう少し甘えてくれると期待していたのだが」
「調子にのんなっ！早く行くぞ！！」
リザはそんな二人を微笑ましく見つめながら言った。
「アルフォンス君には私から言っておくから。お二人とも気をつけてくださいね」

（何にしようかな…）
アルフォンスは街を歩きながら迷っていた。
エドワードはすっかり忘れているようだが、今日はエドワードの誕生日だ。家を焼いたあの日から、いつの間にかそんな概念は捨て

去っていたつもりだが、やっぱりお互いに、自分が生まれてきたことを感謝したい。そんな意味でエドワードはアルフォンスに。アルフォンスはエドワードにプレゼントを贈る。
どうか　あなたが　これからもしあわせにいきられますように
（あ、これキレイ…）
アルフォンスの足を止めたのは、とある出店の壁にかけてある、浅葱色のペアネックレスだった。

“セット２５００センズ”

（うーん。結構お手軽価格だし…いっか）
「すいませーん」
アルフォンスは店の主人を呼んだ。
「はいいらっしゃい」
「これ、包んでいただけますか？」
そう言って壁のネックレスを指す。
「ちょっと待っててくださいねー」
主人は禿頭を下げながら言った。
「はい。セットで２５００センズになります」
アルフォンスが財布から金を出した。
「ハイちょうど。そういやお客さん。“ジャック・ザ・リッパー”って知ってるかい？」
禿頭の主人は悪戯を思い付いた子供のような、見様によっては神妙な面持ちでアルフォンスに訊ねた。
「ジャック・ザ・リッパー？」
アルフォンスは聞き返した。
すると主人は不思議な顔をして言った。
「あんた、あの有名な事件を知らないのかい？」
「すいません。ボク達昨日ここについたばかりで」
アルフォンスが少し申し訳なさそうに言うと、ああなるほど。と

主人は納得して、親切にもその事件の詳細を詳しく語ってくれた。

「実を言うと、私もこの事件に関してはあまり詳しくない」
前を歩くロイは、先にエドワードに告げておいた。
斜め後ろを早足でついてくるエドワードにやりと笑って言う。
「巻き込まれても知らんぞ」
「け。そう簡単にまき込まれてちゃ、おちおち旅もできねーっつーの」
コンパスの差を感じさせる斜め前の軍人を睨み上げて言った。
ロイはそんなエドワードを微笑ましく想いながら、これから語る物語に少し抵抗を感じた。

何でも、最近東方ではやたら噂になっている連続殺人鬼がいるらしい。気に入った人間がいると、薄暗い路地に近づくのを待ち伏せして、そのまま引きずり込んで見事に解体してしまう。という手口から、ジャック・ザ・リッパーという異名がついた。普段は人ごみに紛れ影を潜めている為、住民達はいつ自分が狙われるかと怯える

毎日を送っているそうだ。
　犠牲になった人間も数多く、その殆どが牛や豚のように隅々まで解体され、外見だけで身元を調べるのはとても難しいそうだ。
「その気に入った人間というのが、珍しい姿、極めて美しい容姿の若い人間らしい」
「うげー。なんかグロいよ…」
　エドワードはあからさまにいやな顔をした。
「けど、それだったらやっぱり大佐は兎も角オレは巻き込まれる心配ないじゃん」
「それは私のことを褒めていると受け取っていいのかな？」
「っっだー！ちげーよ！！変人だってこと！！」
　するとロイは満面の笑みを浮かべて囁いた。
「何を言う。君ほどの美少年は見たことがないよ。言わなければ誰も君を男だとは気付かないだろう」
　途端に顔を赤らめ怒り出すエドワードに、今度は真剣な顔で言った。
「兎も角君のその容姿は目立つ。その、機械鎧もな」
　機械鎧の一言にはっとするが、直ぐにやりきれない顔で言う。
「じゃあなんで連れてきたんだよ…」
「是非にといったのは君だろう？なにやら相談もあるらしいし、ついでだから付き合ってもらおうと思ってね」
　つまりはまんまと騙されて知らぬ間に囮になっていたという訳だ。
　とはいっても軍人が一緒では出るにも出られず、今回は何も起きずに終わるだろう。
　信じらんねー。と呆れながらも、相談があるのは変わりないのだ。
エドワードは一度止めかけた足を再び動かした。
「それで？」
「は？」
　いきなり話題を振られ付いて来れずに聞き返すエドワードに、今度はロイが呆れて言った。

「何か用があったのではないのか？」
「…あ？あぁ！そうだった」
とは言ったものの、どうしても切り出しにくい。
「大佐って、兄弟いる？」
あまりにも一般的な質問にロイは拍子抜けした。
「あ、あぁ。兄が一人」
「そう…。何か最近アルの様子が変なんだ。何か隠してるっツーか…猫隠してる態度とはまた違うし…オレに言えないのかな？ねぇ大佐。オレって頼りないか？」
最初は茶化していたロイも、エドワードの真剣な姿に、真面目に答えるほかなかった。
「君はちゃんとアルフォンスに自分が如何思っているか伝えたかい？」
「ううん」
「聞いてみればきっと、何らかの返答は返ってくるはずだよ。アルフォンスが君に話さないのはきっと、忙しい君に負担をかけたくないからだ。家に帰ってからきちんと聞いてみなさい。何かあれば、うちに来なさい。鍵はいつでも可愛い恋人のために開けてあるからね」
素直に意見を聞いていたエドワードは、ぱっと顔を上げると嬉しそうにはにかむ。
「ありがと。オレやってみる」

後半へ続く

後編（前書き）

前回の続きとなります。前回のほうをお読みになっていない方はブラウザでお戻り下さい。

後編

「ただいまー」
「あ！お帰り兄さん」
視察の後そのまま直帰したエドワードに、アルフォンスは嬉しそうに両手に抱えた包みを渡す。
「お誕生日おめでとう兄さん！これプレゼント！」
「…へ？」
「最近こそこそしちゃってごめんね。兄さんのことだから忙しくて忘れてるだろうと思って。ビックリさせたかったんだ」
エドワードはロイに感謝した。こんなに感動したのは久しぶりかもしれない。
「ありがとうっアル」
「えへへ。ねぇ開けてみてよ」
アルフォンスの言葉に、エドワードは丁寧に包みを取り去ると、そこには浅葱色の石でできたネックレスが入っていた。光の加減で限りなく黒に近い青から、向こう側まで透けて見えるほど透明な蒼に変わる。
「でも何でふたつなんだ？」

「もうひとつは兄さんの大切な人にあげる分。…大佐にあげれば？」
するとエドワードは目を白黒させて慌てる。
「なっなんで？？！！」
「お互いに持ち続ければずっと一緒にいられるらしいから」
いつもお世話になっているからね。とアルフォンスが言った。
確かにさっきも相談に乗ってもらったし、たまにはお返しをしてもいいかもしれない。
「うん。あげてくる」

翌日。
エドワードは何時もよりも早く起きだした。
早く大佐に会ってコレを渡さなくては。

『お互いに持ち続ければずっと一緒にいられるらしいから』

昨日のアルフォンスの言葉を思い出しながら、寒空の下、タンクトップにコートの姿で走り出した。
眠れないアルフォンスは、その健気な姿を見守った。
「頑張ってね。兄さん」

うまくいきますように

——黒はオレにとっての

始まりのイロ

終わりのイロ

全てを呑み込む

死のイロ

『だからオレは好きなんだ』

いつだったか、鋼のがそんなことを言っていたな

花屋の前で、ロイは物思いに耽った。
今日も山ほど書類があったが、特技のサボり癖でバックれてしま

った。
どうせだからエドワードに逢いに行こう。
手土産にあの青い花をもって。

「すまない。その青い花を包んでくれ。一番色の濃いやつだ」
「わかりました」
店員の女性はバケツから花を選りすぐり、一番奥にあった浅葱色の花を手に取ると、透明なフィルムで綺麗に包んだ。
「その花は何というんだい？」
「これは桔梗という東の島国の花で、そこではよく染物に使われているそうです」
「ほう」
ロイはまじまじと花を見た。五つの花弁は等間隔に整い、その一枚一枚が光の加減により、独特な輝きを放っていた。

まるでエドワードのようだ…

たったったったっ

エドワードは街中を走り廻っていた。東方司令部にいってはみたのだが、執務室ではリザがロイの帰りを業を煮やして待っているばかりで当の本人は一向に現れない。あのロイのことだろう。きっとまたどこかの店で、他の女性を困らせているに違いない。

（まったくはためーわくなおっさんだぜ）

……人の気も知らないで。そうやってアンタがサボる度に、オレは醜い嫉妬心に苛まれているというのに。

しかし、今となってはもう離れられない。成す術もなく、あの独特でどこか安心する匂いと空気に呑まれて漂うのみ。

と、走り続けるエドワードの目に、向かいの道路に面した花屋が見えた。

（あの花屋とかに居たりして…）

向かいへ渡ろうとした時、

「やあ、お嬢さん。一人かい？」

というくぐもった声と同時に、闇から突き出た二本の腕がエドワ

ードを捕えた。
「〜っ〜〜っ?！」
手で口を押えられているので声が出ない。人込みが途切れたその瞬間をはかって、エドワードは瞬時に路地の中へと引き込まれてしまった。
無我夢中でじたばたと暴れると、さすがにきつかったのか、あっさりと手が離れた。
「誰だ！！」
よく通るその声に、腕の主は笑ってこたえる。
「ははははっ。随分と威勢のいいお嬢さんだ」
「だぁれが女と身長間違うほどキュートサイズなまめだってぇ?！」
エドワードは憤慨した。
攻撃しようにも見つめる先は闇ばかりで、どこに居るのかわからず焦る。
「おや少年だったか。それは失礼した。それより君…」
急に声のニュアンスを変えると、闇の向こうからうっすらと三日月に光る敵の口元。
「ジャック・ザ・リッパーって知っているかい?」
「ジャック…！おまえが?！」
（ヤバい…っ）
エドワードは慌てて踵を返すが、ジャックの足がそれを妨げる。
「逃げてもらっては困るなぁ。これからとっても素敵なボクの芸術品になるというのに」
手の先に出刃包丁を持ち、更に深くなる笑み。
途端背筋に悪寒が走る。
「楽しませてくれ。子猫さん」

――――ロイ……っ！！！――――

「エド？」
誰かに呼ばれた気がしたが。
気のせいだと思い直し、そのまま道路を渡ろうとした時、
「きゃあぁぁあ――――っっ！！」
反対側の路地で凄まじい悲鳴が上がる。あっという間に人だかりができ、同時にざわめきも一層大きくなる。

―ジャック・ザ・リッパーだって―

――うそ、ホント??――

野次馬を掻き分け路地へ走る。一体何事だろうと中へ入ると、ある一点で視線が止まる。

「っ！」

紅い紅い彼のコート。

ぼろぼろに切り裂かれて、最早使い物にならないだろう。しかし、肝心の中身がいない。

「ここだよ」

辺りを見回していると、一方から声がかかった。

慌てて顔を上げると、

「探し物。これだろ？」

そう言って、片手にぶら下げていたものをロイに投げてよこす。

ドサッ

「っエド！！」

ロイは慌ててその小さな身体を受け止める。

三つ編みは解け、かすり傷からかなり大きな致命傷まで、綺麗な肌に余すことなく刻み込まれていた。

「残念なことに、クライマックスで野次馬に見つかってしまってね。芸術品にはなり損ねたよ」

「エド！エドワード！！」

ロイはその身体を揺さぶり呼びかける。だが、かすかな反応は見えるものの、一向に動く気配がない。掌がすべり、見ればどす黒い彼の血がべっとりと染み付いていた。

「あぁ、あまり揺らしてはいけない。生かしたいのなら」

「ッ貴様！！」

ロイは発火布を取り出し、怒りに任せて指を打ち鳴らす。

だが、それよりも早くジャックが投げた包丁がロイめがけて飛んでいた。
「た、いさ――――っ！！」
瞬間、鈍い音と共に目の前が赤く染まる。
「――え？」

ドオォォン――…

ジャックは一瞬で灰になり、あたり一面に焦げ臭い匂いと、生き物の死臭が漂った。
そして、ロイの目の前に立ちはだかったエドワードの体がゆっくり崩れ落ちた。
「え」

何が起きたか理解できず、ゆっくり足元を見下ろせば。
自分の前に蹲る、金髪の少年。
背中にはさっきの包丁が刺さっていて、そこから大量の紅い紅い水が流れ出し、やがて海になった。それはロイの足元にも染み込み、ロイの靴を紅く染め上げる。
「え…ど」
呼びかけにぴくりと動いた。
慌てて抱え上げれば、エドワードが焦点の合わないめで微笑んでいた。
「ろい……」
「エドワード！！っ今すぐ病院に―」
「ねえ」
ロイを遮り、エドワードは言う。
「オレの…ズボ…ン、の、ポケット」
そこを探って。と。
出てきたのは、アルフォンスのくれた青い石。
「これは…」
「プレゼント」
へへっとわらうが、途端に苦しそうに咳き込み吐血する。
「もういい。喋るな！」
喋るだけでも相当の無理があるようだ。
「やっぱり病院に――」
「いい」
エドワードは小さく首を振る。
「もう…無理…だ」
「どおして！」
泣きそうなロイにやさしく微笑んだ。
「…それ、もって…ば、いっ…しょ…いれる、て」
よく見れば、エドワードの首にも同じものが下がっていた。
「ろい…と、お、な…じ、いろ」

黄金の瞳は、嘗ての輝きを失いつつある。
いつの間にか雨が降り出していた。
エドワードの頬にも暖かい雫が落ちる。
「これ…雨？…な、みだ？」
左手を取り、自分の頬に当てていった。
「っ両方だよ」
虚ろな瞳に涙が溜まる。
「ろ、い…どこ？…も、みえ…な」
「ここに！ずっといるから…」
叫んで精一杯抱きしめた。すると安心したのか、ゆっくり瞼をとじた。
「ぁ、り……と」
左手が重力に負けて落ちる。
抱きしめた姿勢のまましばらく動かない。
否。動けなかった。

あぁ、どうかこのままオレの罪もこの人の罪も総てこの雨で流してください

「今から逢いにいくよ」

もう二度と離れたりしない。

その首に青い石を下げて。

紅い花が散った。

その後、駆けつけた軍人がみたのは、

灰になった焼死体と、

赤い海に横たわる

金髪の少年と
黒髪の男

二人は全てをなくした顔で、

けれど幸せそうに微笑んでいて

二度とその瞳を見せることなく

二度とその手を離さなかった。

軍人は、二人を最後の犠牲者として、一緒に埋葬したという。

それから数年が過ぎ、
「どうして…」
丘の上に立った一人の青年が、ポツリと呟いた。
青年の髪は金色に輝き、誰かの思い出を蘇れらせる。
「どうしてだよ、兄さん」
如何してボクだけ元に――――…
青年は蹲る。
彼の足元には、毎年その丘に咲く、

マックロナキキョウノハナガ――――

fin

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5555a/

くろいはな

2010年10月9日19時57分発行